

特集 手外科領域の診断・治療のトピックス

introduction

近年の手外科領域ではbreak throughに乏しい、とよくいわれる。整形外科の他分野では、脊椎外科におけるさまざまな固定法の開発やナビゲーション手術、骨・軟部腫瘍における遺伝子診断や再建術、肩関節鏡視下手術やreverse shoulder arthroplasty、外傷治療におけるロッキングプレート、創外固定、microsurgeryの応用などbreak throughが目白押しである。また、足の外科では脚光を浴びることの少なかった疾患の診断と治療法が、一般整形外科医に普及しつつある。

これまでの手外科発展の歴史をみても、no man's landにおける屈筋腱損傷のprimary sutureと早期運動、microsurgery、手根不安定症、TFCC損傷、鏡視下手根管開放術と、20世紀はbreak throughは途切れることなく続いていた。筆者が大学で整形外科を学び始めた1980年代では、手外科は基礎医学に裏付けられた論理的な治療とatraumatic surgery技術の融合、scienceとartの結晶であると称された。若手医師には先輩を追い越して最先端医療の場に立てる魅力的なfieldであった。

21世紀に入ってから手外科は足踏みを続けている。気が付けば、手外科を専門とする大学教授、准教授の数も減少の一途である。手外科のフロントランナーの1人として、何とかせねばと忸怩たる思いである。このような状況のなかで、本誌の特集は、「手外科領域の診断・治療のトピックス」を紹介していただいた。本誌に掲載できなかったトピックスとして、肋骨・肋軟骨移植や再生医療による関節軟骨再建、日本発のtotal wrist arthroplasty、骨間神経麻痺の病態と治療、などまだまだいくつかの新しい進歩がある。これらのどこかを突破口として、手外科診療の新しい大きなうねりを呼び起こすことを祈念し、挑戦を続けて行く所存である。

信州大学医学部運動機能学教室

加藤博之